



岳亭梁左著
 天竺三德兵衛一代話
 一季芳春画

天竺三德

兵衛

一代話

直

藏書

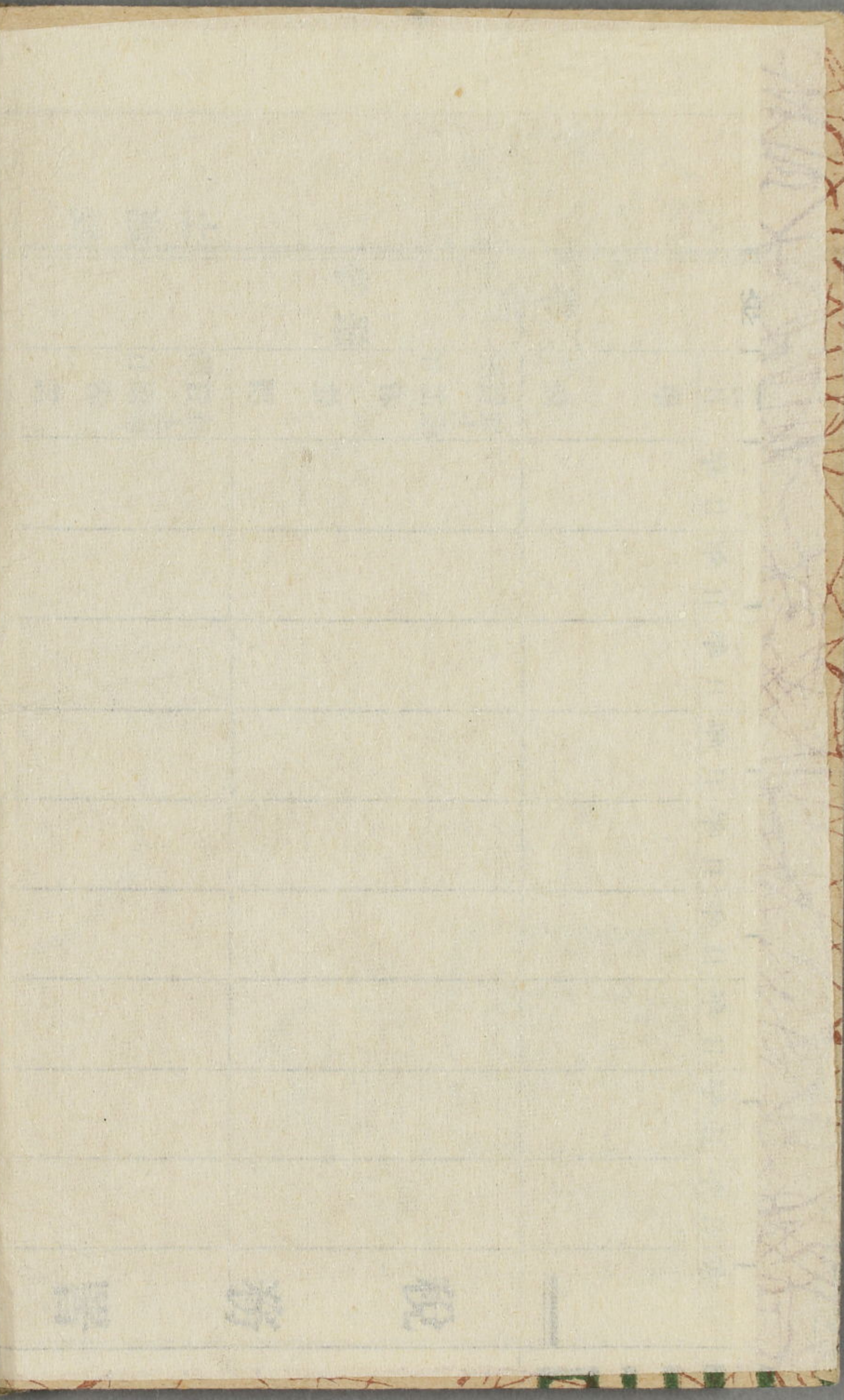
天竺三德





大台徳兵衛代話

持



報警海士漁舟目録

- | | |
|-----|----------|
| 第一回 | 開菊地徳兵衛大墓 |
| 第二回 | 因縁廻合親子面謁 |
| 第三回 | 写毒藥賽女鏡 |
| 第四回 | 知物語旅僧薦僧 |
| 第五回 | 善悪轆轤二人上使 |

雨
水
風

善
く
つ
ま

福
む
り

本

一本
廿五
春
島





晋子
 常七
 吸八
 乃九
 亦月
 中

澤部五郎重康家

仲野女
 喜於烟
 幸作
 獵師



菊地
 曾根之備
 義直

義直
 秋首

執權
 典膳

口片

五月廿
其角

好角

おき



藤墓谷
肉芝仙人

天竺

徳兵衛

海士源松大完

東都

岳亭梁左著

第壹回

菊地開徳兵衛大墓

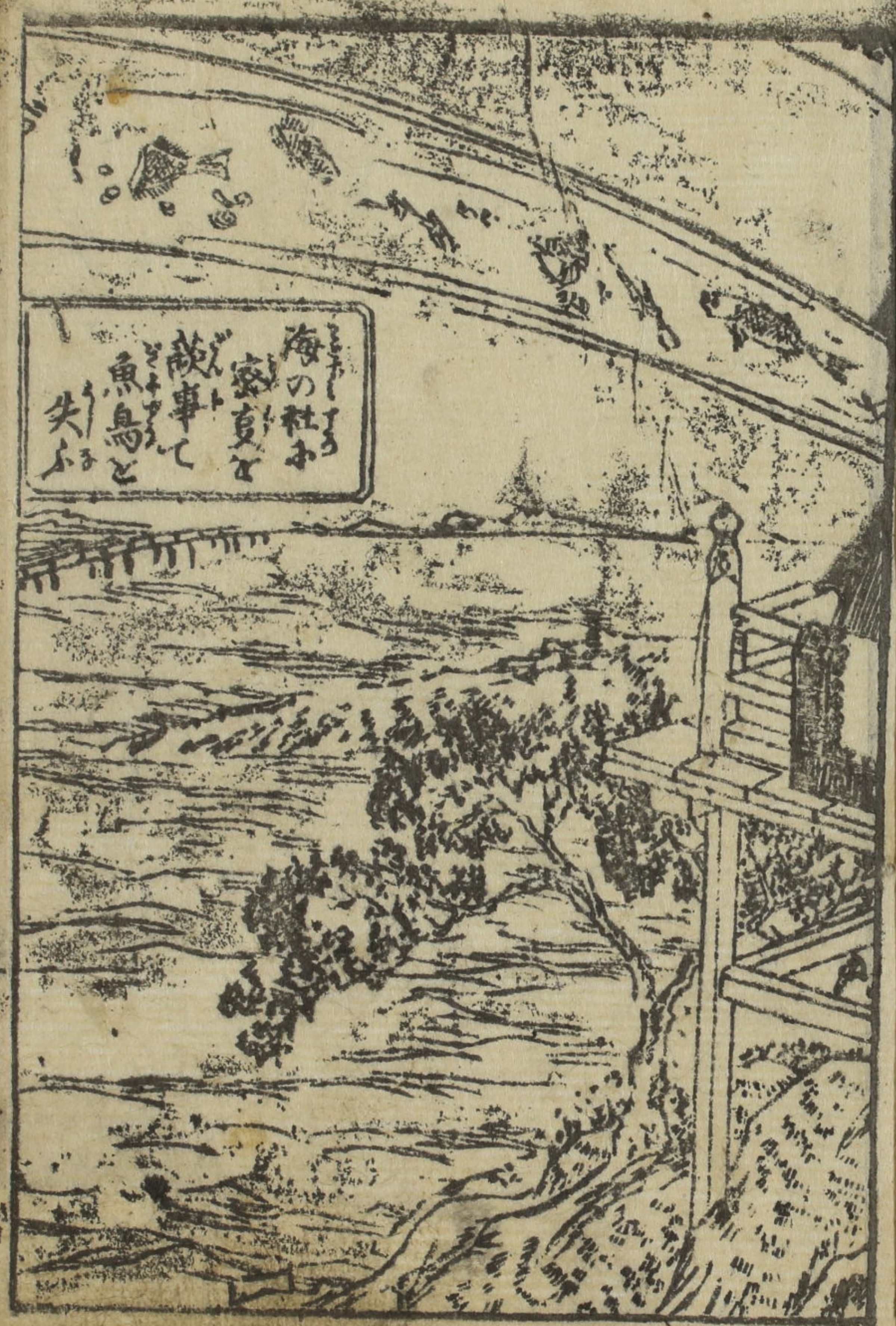
時ハ入重六十七代三条の院長和奉中のおろと名信は雨
墓地者根之補義直とて曰天下ニ一勇士ありしは
真典膳といふのありしは典膳ありしと記載を菊地を
成秋の妻と密通して生腹おれしと記載する成秋が北の方
典膳くるといふ事もおろと名信のむねに記載ありしを
懐指の妻幼時衣服をぬぎ取置へ帰されけるが彼を幼能ハ

親里をて男子出生せしその男の産後父を失ひて其母親も
追つて男子の行方なきをばあけり先陰をゆく過て秋の
北の方のみまきり今秋秋本旅の子長考根之補の代とるが
若根之補の此の方とありといふ妻と往くと山腹を去り
妻後小ま人の男子を授け名を月影とよびて今年六歳を
あつたけり後小ま典宿へ先妻の妻初産の腹も出生せし
秋流の男子何処におるかと尋ねてその末なるが彼男も今年十九
歳よりして根之考字のの林藤小實しく著しきるが典宿客も探
して早速尋ねりてその行方を終つて親子の名前を尋

頼師あつてうまの術とあるひみ思長をうかうと尋ねるが
此大暮へ往き彼もうさびきりて色よく彼も子あり
身許をえ居け味方におるべしとて荒治部も口人坐治を
とらふて道あるべしとて大岩のきりある船もいさうさ暮の
船も白して送とるが彼の方を指とて一人の頼師も有る
典宿指子と見る子面魂世の常ありげを遣さくみえぬ
よふは男の夫の遺書信もあつたやとたづねけりよはくは
あつたといふ典宿をづきて各刺帖しけりよ今にせらるる
とありてあをねの徳も信ありしやとよふとあつたといふ

名く審事と稱す小徒を清りしや我もこのぞ有出雲之云
格うごこし紙張家小徒なりし人といひ人を知ふ事其初の備
知と号位ある者州前よりして往き備典膳を命ひし細を以て
徳儀の企て先以奔とりて備地の家のまくとせんまはれ方の
細少く若根之痛とるたりのじ北の方月若丸をうしむは先紀
取程の定るといはし紙牌を世次とせんともある御成もふひは
つと下と今より百ある者座の送りあるうとえ流しけきや陸奥大
いふよりとび紙著の州と云い先奉鬼界島の暮谷ふて園芝
道人といふ是人ふ出雲彼道人を知の師といふ三井か間難事

母初産をなつるふ上二歳のことたよりぬ取ひある者いふかやくま
むのこましと云書写山の内山谷ある者あづけりしうしげそ
のつらけ者いふかやくまあふとと種ふ典膳ふりたるた思ひとほし
そきより客ふ金根長服を送りてありけりうしげの徳儀と企て
自君若根之痛り月若根子とあるきりのとし先重の御成に
言ふしと紙子と兼地の家勢とせんといふ同撰筆書屋遠又ハ
宗園治るどつと若とていふ客よりと種りたるがあらとた典膳ハ
春遠園治を信い信ふ書写山のあのとあり紙子の書屋のいふと
春遠宗治不台是より兼地兼治身若虎とたのいせまうし筆



海の社
魚の事
失ふ



三虎

長門

笠野

子か漢方海神の杜少寧持て来りて其の末一海客と云
出づ酒宴のひらふやや教者へ自若と宣中より其の
飯も花りある典膳作りやだの格も相憫と云ふ人か宗園
侯何の不言もやと見ゆもと云ふと食物の花り
あるは道しゆくも後世の事大異あり都て一彼の
生中中人のくくしてあやうく大異ありて
此を皮を被食物をいせうをうらふを
とてと云ゆらふ油と典膳を造らふと云ふ典膳
思案しそいふふある人の事なり

昔行くと云ふ中支那海客の子と生一
飛遊仙人と師らして昔行と云ふ一
天竺往來傳と云ふ事ありて
舟に魚刺しけり是より往來傳へ
船と云ふに其思案根之傳子舟
美女と好む臣の者としてひ
とも時として其傳事世に
有根之傳の北の方其方の
いよりあけり忠義の家来

魚の
食
大
空
鳥
の
大
氣
と
と



宗田光

るべき覺悟をして君の御前にお出なすは例も其由御座候
遣宗國治世女御形と集り酒祭の時のうらぐとあふい志賀を
ハ此亦ともみ當分の利とのべをゆきことしてあることと流をぬ
候ふ芳根之補及利をせりし即ちなまをわうきう人おん
ねど厚風の朝う候徳を信の大暮芳根之補お怒れと云
けりなまの怒の面色替りてあはれ志賀を御我身御
さうけりしを怒れまごとのひふとひくふえう覺悟の
志賀を御あもとのけりしとおけを芳根之補をまはさ
候とのけりしを怒りしと忠信する志賀を御もこれをも

縁どのおひぬらむと分退の御ありと福ありもゆりひり
るうおける典膳あまの身てこの縁をぬじあるとは芳根之補の
お不出志賀を御あはれせしゆら御あはれする御若の御女
秋高うう志賀を御お送りする密土あり兼て月若丸の君の
種ありと云るせらも志賀を御がなるはし則ちらのあまの
向ううと芳根を御根之補を御あはれする典膳御自の御書
あて御めまはらふおぞ思ひぬお指ふるうらむを典膳を
とれめらる時におのの暮密おまを吹うけらふを芳根之
補をさしをひらけらる種も自若もあはれ

根之傳りて秋雨と海出りて子の抱きとさくを汝むおど
わえ思ひあわと黒髪とて刀を杖に殺す値岩を那を
考云よ汝月若とて永漢おしう首うぐと余る典
よ海仍志賀お節と茶を分て探しと中討ちる松も岩と那ハ
月若丸と雲物よの世彼永漢の浪おさるよあうは思ひの
若君とも云若て月若よとくかうと云たれは今年五歳の
月若丸切りてふと云ああび加加うう出て岩と那を見
此何の何と云処をなるあ四ふけ処(連来うしそと尋るもそ
まうと胸あさうは是まをハ汝を君の若君とおがれが詩ハ

志賀お節と秋雨の子なる思ふ今汝が首をおさうとく
先控の念佛せよと云よ月若あさくもさては我身ハ二人
寄通してあさうなる子なるや親と思ひし由まをもは重と
を那来ハ移してあうしとの木の葉のうたふとあせせ
増もこのと云すと此を延とる信まう那命永漢お岩と
袖とあがら時お典膳が那来境若平始お誦歌う那来と
別やううとく首とおさうと云は思ふ那の那来も
月若丸ううしうお母の刀横月若が那お打とて若平が首
たすうおおををたす那来あひちし直知うたあうか



花と折
義直
海堂の
あらし
雨と散

康史膳

月若九



菊地曾根之輔

安秋雨

月若丸の敵賊機より来り、機若平を討つハ若丸をなす
心う今しも北の方より来り、且と密に志願を弁と村に告
通あり、其の思ひなき典膳が村来の密を知らざり、
秋の月若丸を殺し、母を殺し、母を殺し、母を殺し、
知らざりしを、今も密に告げし、
助勇を志願して、時を待て、
移すを伺ひあらしと、
月若丸を連り、
戒の戒若丸の浪り

第二回 内縁廻合親子面謁

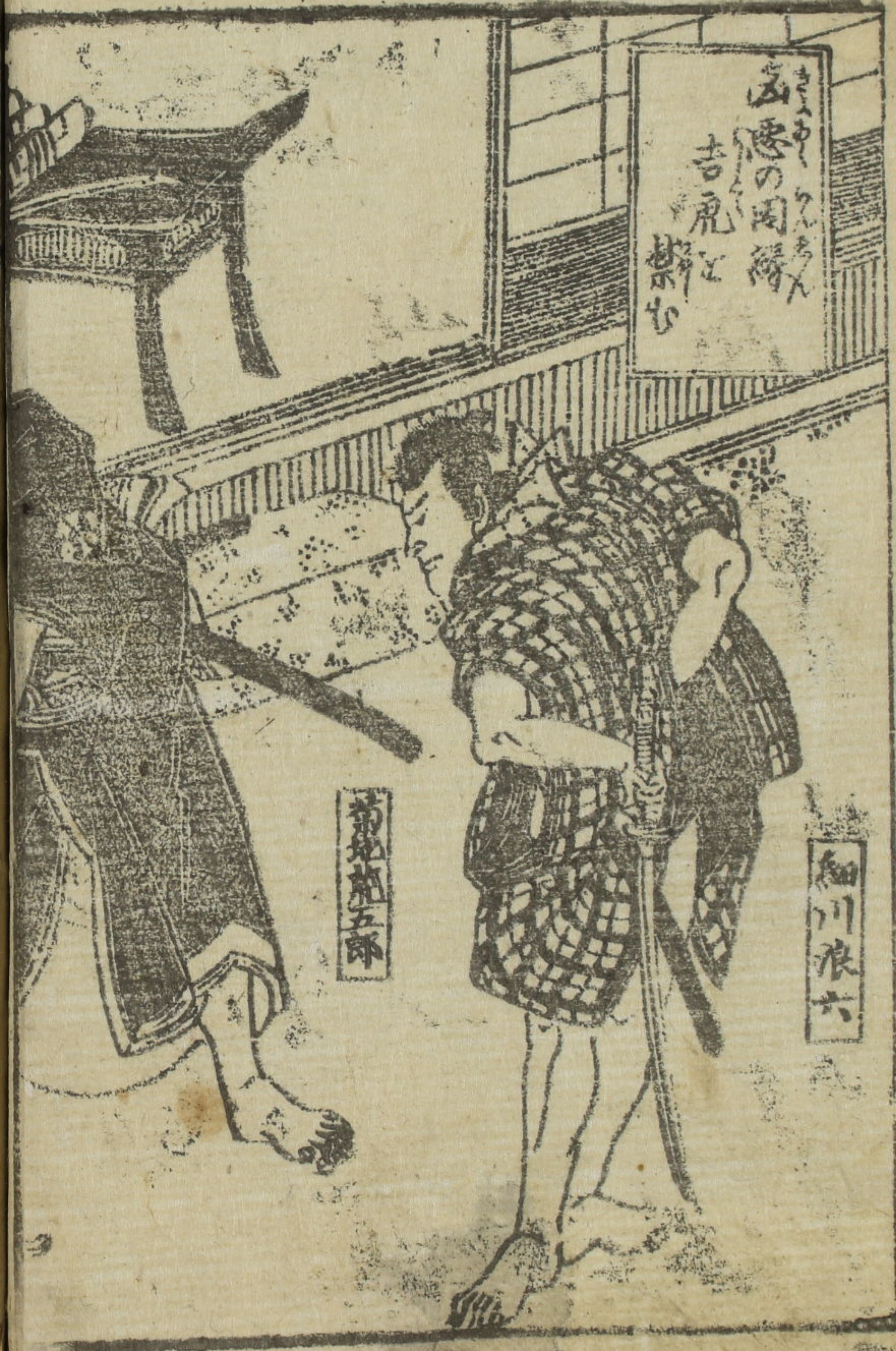
機若丸の敵賊機より来り、機若平を討つハ若丸をなす
心う今しも北の方より来り、且と密に志願を弁と村に告
通あり、其の思ひなき典膳が村来の密を知らざり、
秋の月若丸を殺し、母を殺し、母を殺し、母を殺し、
知らざりしを、今も密に告げし、
助勇を志願して、時を待て、
移すを伺ひあらしと、
月若丸を連り、
戒の戒若丸の浪り

月若藏楸が女ハコノを有る小ウラ母小典膳が子兼地着の云
からあどちる細川源太といふ老宗が京に居る自の浪あが方小
のそやと慶理と表ぐ夕暮いろ浪あふ合多きバ二人連きて依
ちが隠家よこそききける子地着量の軒下小盤を祀せし女ハカ
位の胃子と抱吸目まのいあ君とおがめられたる小は男なりしも
今日ハ慶理の月若丸はあ後さよと云き小荒の舟の舟の浪あふ
月若丸ハ御儀楸の連り方あきびとするがひ知れまを喜交
あそ切腹一父典膳及小孫をせん地着量のろろあふ二入ひこ
一切て楸が面方東方不見くろきとて地着よこそいこうなるおひ

二のまふあうて楸根の四ハ月若丸と抱一楸の安あうる自あ人
居の夕路あはし荒の舟の切舟の舟の舟の財儀有先く乳の
中を二カ切りし何と一妻あけと荒の舟ハあさるる月
のあさるるにんれバ母あうね尼法師者死声とせうあひて
のあふ楸がと殺一あをやと世の徳佛子おむるの命を中
むかあふも子あゆとあせぬと子荒の舟ハ甲子と見せ
此後の子小楸うせせん楸ハ善地着の舟と云きろろあふと
真國船子楸子と楸が書山の楸子楸子と楸と右是成秋
の妻物楸が腹も花せし火面筋とろろあふと楸の舟のあやと



草庵尼



吉原の因縁
禁む

菊池五郎

細川浪六



五作幸作
妻の別と
うみしむ

妻於畑

太郎松



父五作

幸作



半休

半休



大木



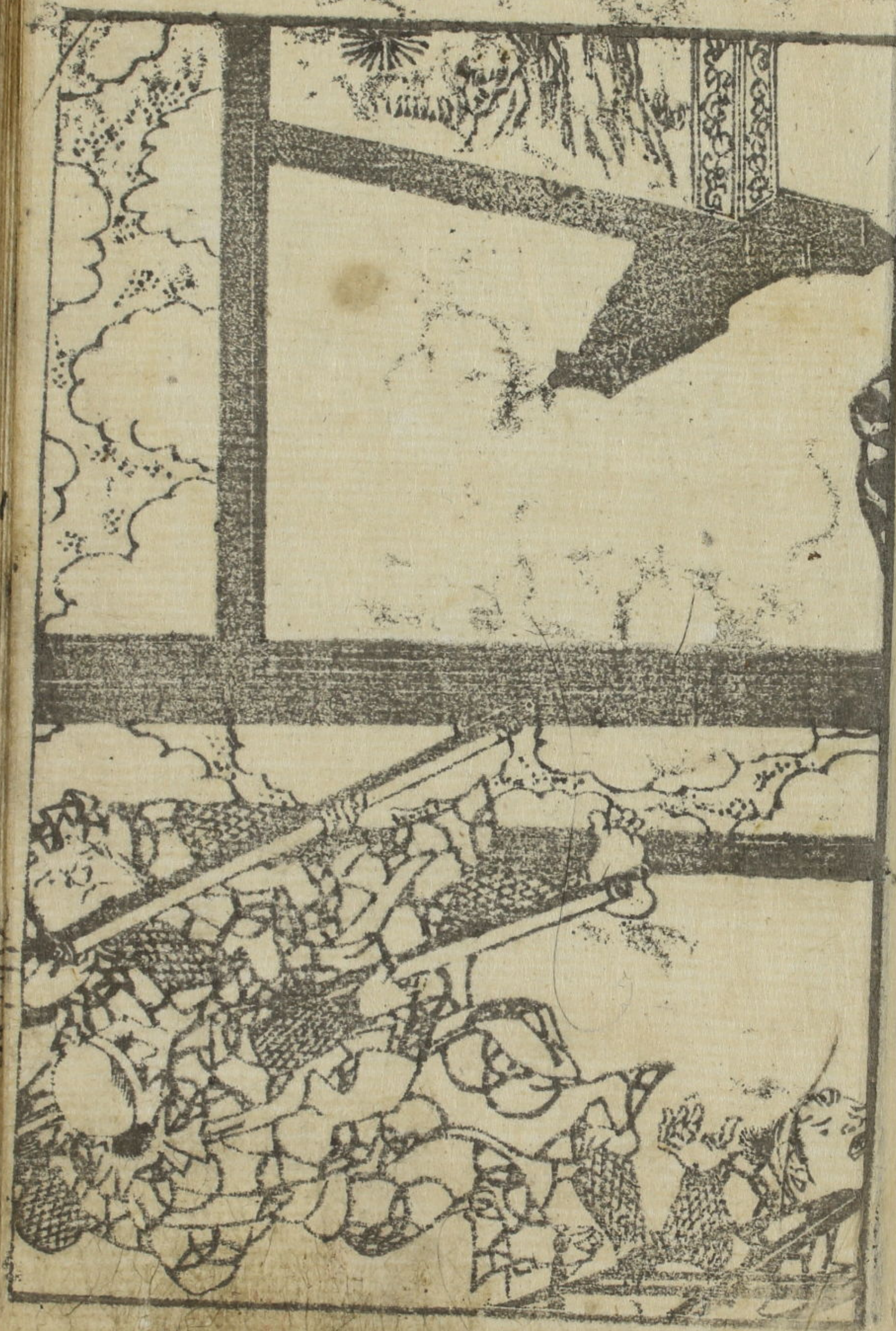
五作

腕に巻くはしつと云ふ事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
是れ我の心と云ふ事生れぬ中へ時刻のつらき名士の死
後僅ふつと云ふ事つらき事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
和人の儀と云ふ事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
此布と云ふ事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
布の金と云ふ事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
此布と云ふ事作はれどあつたは身毒の毒なる如く

第三回 寫毒藥寮女鑑

此布と云ふ事作はれどあつたは身毒の毒なる如く

なと云送つた事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
物事と云ふ事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
けりお火の事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
よと云ふと打込の事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
これと云ふ事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
と記し候極多の事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
名やせんとの事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
名と云ふ事作はれどあつたは身毒の毒なる如く
大いなる事作はれどあつたは身毒の毒なる如く





笠野重藏

長次郎

菊地亮五郎



天竺徳兵衛

三十一

引籠り念佛種のたまはるく洞のらくひりもあき極まゆへ賦
 概十月君とてさるれ世あるたの府依をど流をのて撰おゆく
 ありさるふ初らうたる世をたの存目のさるふと清田春七と云を
 存也一月君とてあを尋肯うてあをたことそ付たるとまの
 方すたまひ種まゆがあお出だ君あ般ひあう月君長傳の志
 實ち那が種あることそゆたうとも是人を何とぞ志實あう
 行方と尋實とてしゆらとととつたはを封てまじしものを
 尋ちあふ典書悟筆遊宗園治のそ人の方志とぬう
 流るるものゆらとととそ極まゆあやあふ秋とをもたを

月若の密通の子おおはるるゆら一時もさき肯あそくと
 月若の行末と方いと尋一は清田の園て撰師六代の方
 園まあはしむもさうるるゆら又海流の筆作の
 ためおあふあひとてと宛中とてう余を恥うけらう業地
 家うり月若とてあ小傳と尋しし筆作方と園ひあひとて
 ひまふ世もて合あせんと筆作があうと見返はるるあ
 ち那ねとて遠引扱てああうと五作の月若て退り門とあて







大正金徳をてぬんとなす徳を揚我身の上のあらうれ小口と知志
あらじ流六上宣舞て奉てらきと秋うを荒八舟航るのいじり
志まつてよ今てふ系地の荒八舟へ六海盜初知案の夫を徳を
流とていひことすてしりう流とてきふす徳を流るの如く
流とていひ初世でんと今不徳を流るの如く流るの如く流る
と六十の年出羽の大徳といふ所を衣よふ徳を流るの如く
流るる一里の如くし四天下の如く流るの如くと徳を流るの如く
流るる如く流るの如くし六家来にて流るる徳を流るの如く
流るる如く流るの如くし細川及て今不徳を流るの如く流る
と

流るる如く流るの如くし六家来にて流るる徳を流るの如く
流るる如く流るの如くし細川及て今不徳を流るの如く流る
と



ありし不汝も只膝下組一若のむとてし秋雨せうあちまき荒る
奔物あひ人を射しめ決りしし流るゆへも白のまはるは丸の
是不在とて不徒まほあさういぬあひとてせしむる言ふの
もそ中へるは正しく是もふりしむし不蛇の得歯とてあつてお
まはるは是れ因道人の知まらるるゆへにゆへにゆへにゆへに
まきへ見悟せしむれいりきへ事作しゆへにゆへにゆへにゆへに
の方まの款と長力とて取用むし不徒まき力とあつてゆへにゆへに
い不事作流古不徒まき力とあつてゆへにゆへにゆへにゆへに
る不事作流古不徒まき力とあつてゆへにゆへにゆへにゆへに

ありし不汝も只膝下組一若のむとてし秋雨せうあちまき荒る
奔物あひ人を射しめ決りしし流るゆへも白のまはるは丸の
是不在とて不徒まほあさういぬあひとてせしむる言ふの
もそ中へるは正しく是もふりしむし不蛇の得歯とてあつてお
まはるは是れ因道人の知まらるるゆへにゆへにゆへにゆへに
まきへ見悟せしむれいりきへ事作しゆへにゆへにゆへにゆへに
の方まの款と長力とて取用むし不徒まき力とあつてゆへにゆへに
い不事作流古不徒まき力とあつてゆへにゆへにゆへにゆへに
る不事作流古不徒まき力とあつてゆへにゆへにゆへにゆへに

